

子どもの活動と保育空間（その二）

堀井 仁子

スペース保育の朝

「おはよう♪」と元気な声で、ベランダから登園して来た子どもたちは、まず、カバンの置き場が変わっていることに戸惑い、不安そうである。しかし、保育の誘導で持物の整理をはじめ、子どもたちは、いつもと違った室内を見まわし、落ちつかないが、保育が、

「ほら、あそこに、オバケのバーバパパの絵本（子どもたちの大好きな絵本）があるわよ」

「ブロックや積木もあるわ。すきな所で、あそんでいいのよ」と、声をかけると、バァーとかけ込んでゆく子ども、モジモジと行動に移せない子どもなどさまざまだった。

保育は、活動空間の中へは、入りこまず、全体を見わたせる所に位置し、子どもたちを誘導したり観察をする。

坂本さんは、

① 子どもや保育と接触はしない。

② 10分間隔に、あらかじめ準備した平面図に子どもの活動を記入してゆく。

それぞれのスペースでの子どもたちの活動は、三歳児の場合（前号 図15を参照）を例に取れば、

● 集まるスペース

設けられた集まるスペースは、食事のスペースと重複的に利用したが、出席した十一人の子どもに対して、ちょうど良い広さ（面積として六畳間の広さに相当）であった。そして、間仕切りとして使った家具の高さ（八十七センチメートルぐらい）も

保母にとっては、子どもを把握できるが、子どもの視界をささげるため、適度な高さだった。それらは、ややオープンな活動においては、「私の場所」として、安心して活動していた。

● 絵本のスペース

静かな活動の場所として、奥まっているため、子どもが飛び込んで来ることもなく、常に、四～五人の子どもが、落ちついて、自分たちのすきな絵本に集中していた。

● 室内の砂あそびのスペース

ポリ製のタライに砂をいっぱいに入れたものをふたつ用意した。ひとつのタライに三～四人の子どもがあそぶには、ちょうど良い大きさだったが、ふたつのタライの間隔が狭かったので隣りの子どもとぶつかりあった。その上、ものめずらしさも手伝い最高九人の子どもが、集中し、スペース全体が過密となった。少しでも余計にあそぼうとする子どもたちがせりあい、十分あそぶことができず、トラブルが起き、あそびは長続きしなかった。

結局、目新しいものを取り入れる事は、慎重で、かつ、十分な準備が必要のようだ。

共同研究者と職員との話合いの中から

活動空間（スペース）を設けるために、担当保母が、平素、子どもたちの慣れているあそびなど、いくつかのあそびを取り上げ、その中からワン・ルームの保育室で可能な広さ、条件を持つものを平面図に配置してみる。

この平面図をもとに、建築サイドの坂本さんによって、検討・修正される。

建築的な（保育を行なう空間としての）基本がここで保育と合流し、より効果的なものとなる。例えば、通路は、具体的に何センチ取れば良いかとか、子どもが椅子にすわり食事をするためには、どのくらいの面積が必要かとか……。他の活動空間との兼合いで、それらを総合した上で、決定している。

第一回目のスペース保育を実施した後のミーティングでは保育者・建築家両方からさまざまな意見がでた。

1 集まるスペースは、是非必要である

子どもが安心して、自分の「場」を確保できることにより精神的に安定する。

限られた活動空間の中で、いくつかの活動の場として、重複し

て使うことができる。例えば、お集まり、食事、テーブル・トイレなどであそぶ静的な活動等々。

2. 午睡のスペースについて

計画の段階でも、既存の保育室であるため、十分な面積が確保されないままでの実施だったが、やはり狭かった。テラスから便所へ行き来する時など、通路を取ることができなかったので、ふとんを踏んで通る有様となってしまった。

3. 敷物を敷いただけのスペースでさえあそび方がかわる

子どもたちは、「場」の意識を持ってその中であそぶ。そばを通る子どもも、中をのぞき込んだりするが、あそんでいる子どもは、あそびをするとはしない。ブロック・小型積木等は、このスペースでどっかりと腰をおろしてあそび、長く続き発展する。

スペース保育から得た保育効果

「とにかくやってみましょう」と、実施したスペース保育から保母は、たくさんさんのメリットを見出し、今後も研究を続けて行く気持ちを持たせて持ち始めた。しかし、年度末・年度始めの混乱する時期での実施は難しいので、各クラス独自にひとつのスペースを設けて、その中での子どもの活動を見守っていった。

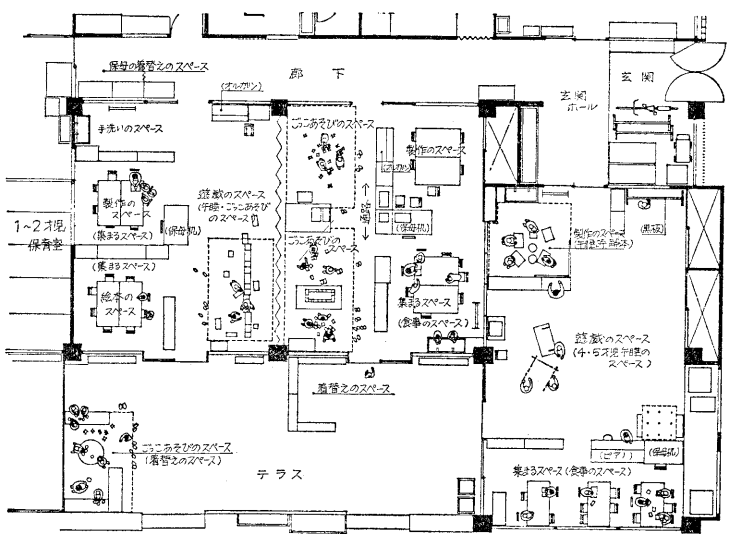
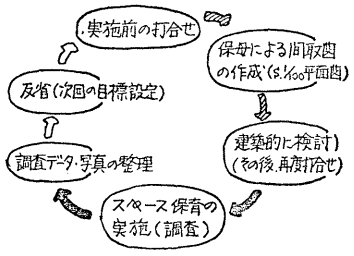


図 6

図一6 年齢別のスペース保育 (S50. 5.16 AM. 9:50)

二回目の実施は、五月十四日から二週間。一クラスに、三〜四か所の活動空間を設けた(図16)。一回目の諸々の反省を経験として、ミーティング(図7)を十分に重ねたため、子どもたち、保母の戸惑いは、ほとんどなかった。その上、徐々にはあるが、「保育空間を、いま一度、考えなおそう」という気持ちの方が保育者自身に高まりつつあった。



図一7 研究方法のダイアグラム

五月末のお誕生会で、一日活動空間を解体したが、六月に入つて、第三回目のスペース保育を二回目の形態に修正を加えて、実施した。

この三回にわたるクラス別のスペース保育を実施して得られた保育効果は、以前の保育と比べて、

- 子どもの状態について

全体的に、落ちつきが見られ、なおかつ、集中する時間が長くなってきている。

実際に、これまでは絵本もパラパラと絵をめくるだけのことが

多く、周囲のあそびに目を向けたり外部からの刺激により中断することが多かったが、絵本のスペースに入った子どもたちは、二〜三人で絵本を見ながら話合ったり、自分の好きな本に熱中している時間が多くなった。また、自分の好きな本の物語を、ごっこあそびなどに取入れ始めて来ているのは、内容理解が深まって来た、とても良いのではないかと？

● 保母・用務員の労働について

保母は一日最低三回(食事・午睡・おやつ)の準備)机・椅子を移動させなければならない。これら unnecessary 労働がなくなり、その分、子どもたちにお話を読んで上げるゆとりすら出来るようになった。

一方、用務員の方からは、保育室が細かく仕切られているので、掃除器や、モップがかけにくいとの意見が出た。しかし、掃除器のかけにくいところは、ほうきを使うなどの方法を考えてみることを話合った。

夏季の合同スペース保育

現状の中でできる限り活用できるスペース作りを考えて実施して来たが、面積の狭さはいかんともしがたい。そこで、七〜八月

園児のいくらか減少する時期に園全体を縦割りにする試みが実施される。

実施前のミーティングでは、これまでの反省をもとに、夏の暑さ等も考慮し、通風・採光・日陰など、できるだけ気持ち良く過せるスペース作りを目指した。

今回は、園全体での取組みとなり、各々、自分の意見を出し合い調整して、図18のような配置計画でスタートした。

しかし、幾日も実施しないうちに、いくつかの問題が起きた。それは、クラス別とは違い、大人数ではやはり狭かったり、また、子どもの人数が多い割に、広さをあまり、必要としないことなどであった。暑さについての問題では、スペース内に入る直射光を避けるため、カーテンを引いたが、かえて暑苦しかった。これが、レースのカーテンなど、涼しさのあるものだったら良かったのだが……。

そこで、坂本さんが、保育の意見を取りまとめ、話合いの上、図19のように変化させていった。

七月三十一日からの合同スペース保育

今回は、特に、異年齢の子ども同志の交流と、五歳児を中心と

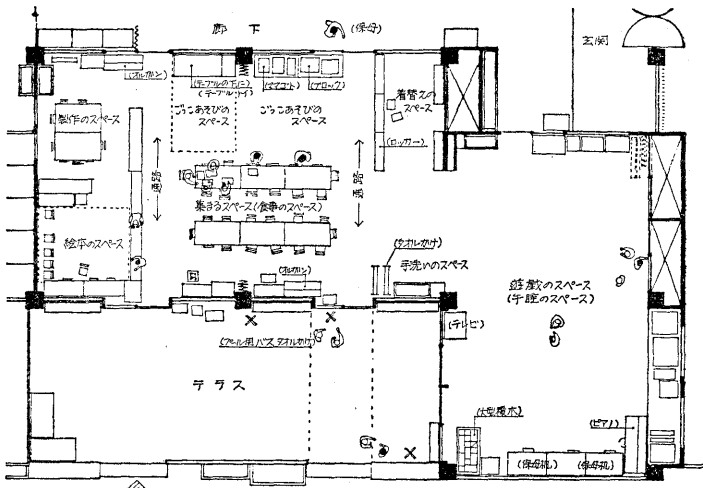
したあそびの発展があれば……と期待しての試みであった。子どもたちに、きのうときょうの違いに気づかせながら新しい設定場所を確認させてから、保育が、

「いろんなあそび場があるけど、みんな、いちばん好きな所であそぼうね」

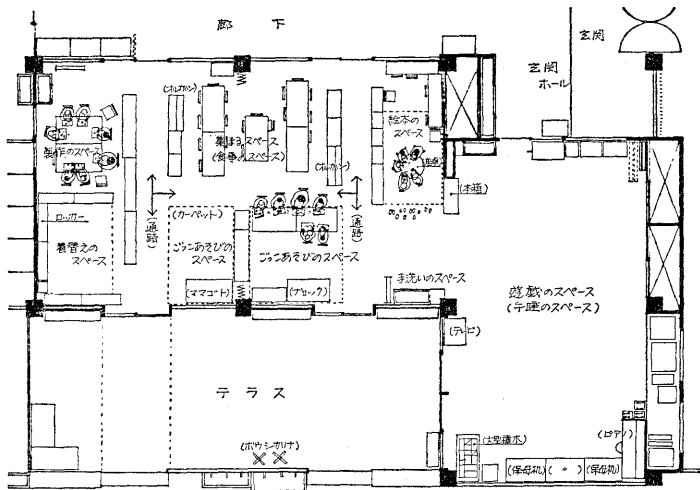
と、言葉かけると、子どもたちは、スムーズにそれぞれのスペースに散って行く。積木のあるスペース（ごっこあそびのスペース）には、五歳のあや・よう子を中心に、二歳のリエ他二・三人が自然にグループを作ってあそんでいる。箱型積木を机の上で使っていたが、だんだん発展して、カーペットの敷いてある方まで広げてあそぶ。

当初、意図した異年齢の交流は、目的に近く達せられたが、五歳児は、思いのほか、リーダー・シップを発揮しなかった。それは、常に、リーダー・シップを取っていた子どもたちが、休みがちだったからか？

おもしろいことには、同年齢同志のあそびよりは、異年齢のグループの方が、あそびが長続きすることが見られる。年上の子どもが年下の子どもへのいたわり・思いやりが現われるため、反対に同年齢で力関係が同等だと、えてしてトラブルへと発展しやすいことなどが見られた。



図一八 合同のスペース保育 (S50. 7.28 A.M. 9:10)



図一九 合同スペース保育 (修正後) (S50. 8.11 A.M. 10:00)

夏季のスペース保育は、現状の保育室の中で、合同の保育が八月いっぱい実施されたが、比較的広さ等ゆとりすら感じられた。それは、子どもが定員の三分の二の出席であったこと、子ども・保育者がスペース保育にすっかり慣れたためであろう。

秋には、運動会の準備・お店屋さんごっこのため、積極的に製作のスペースを取り入れてのクラス別スペース保育、本番の合同のお店屋さんごっこへと発展して行った。

それはやがて、五十一年四月には、定着期に入り、その時期や子どもの特性に合わせてのスペース作りをクラス別に実施し、保育をより効果的に運営できるように保育者自身が常に気を配るようになって来た。

「空間を活用した保育」(保育者の意見)

最初、難色を示していた高橋保育も、今では、次のように述べている。

『現代の子どもは、自主的にあそぶようになっていくと、よく言われる。広い場所、のびのびとひろがる原っぱで何をしていいかわからない子どもがふえている。』

『どうしたんだろうね、今の子どもは?』と、おとなが言う前

に、小さい頃からあそびを生み出す訓練のなかった事、考えさせ展開を見守ってくれるおとながいなかった事に、目を向けるべきだと思うの。そして、集団の場においてのしつけや規律の中で、おとなが動き、子どもをその枠の中で監視しているような面があるのではないかと……。

『子どもはあそびの天才だ』と思っている私にとって、もっと深く、子どもにとってどのようにしたら良いのかと考えながら保育を進めてゆきたい。

それには、その空間に慣れる事。そして、例えば遊具は一か所にあり、どこからも簡単に選択が出来たり、固定してあったり……。子どもが、

『あつ、今日はあれやりたいな』と飛びたくなくなるような魅力のある遊具の配置ができたらと考えています。また、せっかく作りかけた、展開しかけたあそびを日案の時間によって断念しなくてもいいような配慮ができたらと思っています。

監視の目からのがれ、ある時は同年齢、ある時は異年齢であそんだり、けんかしたりして、子どもたちの心のふれあいによって、子どもらしい成長がこの空間を活用して、生れるのを見守れたいと思います。

(板橋区弥生保育園)

≡ つづく ≡